

『我等の一団と彼』の「私」

——その人物造型について——

はじめに

石川啄木の小説『我等の一団と彼』^①の語り手「私」について考察したい。これまでの研究では、「私」について、二つの見方が提出されてきた。一つは、機能としての語り手とする見方、もう一つは、人間の実質を備え、作品の主題を担う語り手とする見方である。

前者は小田切秀雄によって代表される。小田切は、作品の主題を「彼」＝高橋彦太郎が担うとして、それを次のように述べる。

「社会の矛盾とその変革の必要についての鋭い先駆的な把握、しかもさしあたり変革の可能性はどこにも見出されず、かれ自身その点ではまったく孤独無力であり、現実にたいして指一本ふれることができないのに、醒めた心はつねに批判をしてやまない——自身のこういう心の働き方に疲れた孤独な知識人の自意識の苦しみを描くにいたっている」。

そして、「大逆事件の衝撃で、かえって社会主義の問題に正面から立ち向かうようになった啄木の、思想的な誠実のゆえに避けられなかったこの苦悩」と、高橋の姿が作者啄木自身の姿でもあるとし、この解釈のもとで、語り手の「私」について次のように説明する。

（傍線は若林、以下同じ。）

「我等の一団と彼との関係は、ごくふつうの意味での善良ですぐれた一般的な知識人たちのがわから、この特殊に深い主人公を照らし出

若 林 敦

し、両者の人間的・思想的な結びつきの必然性を描きだしたものとして注目にあたいる。夏目漱石はややのちに『行人』や『心』のなかで、ごく平凡で善良だが人間的な深い問題にたいしては素直な感受性と理解力のある人物（『行人』の二郎、『心』の私）を設定し、これを通して近代的人間としての深い入り組んだ苦悩を抱いた主人公（『行人』では「一郎」、『心』では「先生」）を多数の読者たちにわかりやすく説明する仕組みを編みだしているが、啄木はすでにこの作品でそれとあい通ずる仕組みを創意しているのである。」

このように、小田切によれば、「私」は「彼（高橋）」＝啄木の姿を読者に伝える役割に限定された、機能としての語り手となる。

後者は上田博によって代表される。^②上田は、作品の主題を「知識人をとどく毒害している近代の虚無的思潮、生活態度としての二重生活」への批判とし、それを「我等の一団」と「彼（高橋）」との関係が担うとする。その中で、「私」は「単なる語り手の役割」に止まらず、高橋を批判的に乗り越えようとする作者啄木の姿に重なる人物であるとされる。

「高橋が社会を広くかつ深く洞察する認識の目をもちながら、それらに積極的に働きかけていく足をもたず、虚無的傾向に陥っていることはすでに述べた。」

「認識」と「実行」をどのように画定し、どのような方向へ統一してゆくのか（略）。「私」が高橋から離反し、病友松永のために手紙を書

いたとき、それは現実を形成するものとしての人間を自らのうちに発見し、人間への信頼を回復する行為としての意味を帯びていたのではなからうか。」

『硝子窓』の次の部分は「我等の一団と彼」の主題と重なっているように。

私はもう、益の無い自己の批評と解剖にはつくづく飽きて了った。それだけ私の考へは、実際上の問題に頭を下げて了った。―若しも言ふならば、何時しか私は、自分自身の問題を何処までも机の上で取扱つて行かうとする時代の傾向―知識ある人達の歩いてゐる道から、一人離れて了った。

「何か面白い事は無いか。」さう言つて街々を的もなく探し廻る代りに、私はこれから、「何うしたら面白くなるだらう。」といふ事を、真面目に考へて見たいと思ふ。

「知識ある人達の歩いてゐる道」から一人離れて歩き始めた啄木の姿は、高橋とは違った道を歩み始めた「私」の姿に重なる。^④

このように、上田によれば、「私」は人間の実質を備えた、主題（高橋批判の内実）を担う語り手となる。

私は、『我等の一団と彼』の主題を、「理想主義的な信念（主義・主張・思想）と「利己」の立場との矛盾（＝二重生活）を抱えた高橋の葛藤と、その葛藤を「利己」の立場で解消しようとした高橋を蝕む心の空洞」への批判であると考えている。^⑤これは上田の解釈の延長線上にある。だが、語り手の「私」については、その担う主題についても、啄木との関係についても見解を異にする。本稿は、その点を論ずる。

一 自己犠牲

明治四十三年六月十三日付岩崎正宛の啄木書簡は、『我等の一団と彼』の執筆中に書かれたものである。その中に、次の一節がある。

君は好い兄弟を持つてゐる。僕はさう思ふ。妹さんは何うしてるね？ あの人は立派な女になる人だ。女学校を卒へたら必ず東京へ出し給へ。出すについての方法はその時になれば屹度出来るよ。それは僕は保障するよ。さうして今から「東京へ出す女」として教育したまへ。「次の時代」の為に我々も或程度までは犠牲にならうぢやないか？

あの人はたゞの人の細君とするには余りに惜しい人だ。

啄木が函館の友人に、その妹を東京に出すように勧めている内容である。「あの人は立派な女になる人」で「たゞの人の細君とするには余りに惜しい人」だという文面に、啄木の期待が表れている。おそらくそれは、結婚してただ夫や子供、舅姑に仕えるだけの女性になるのでなく、自己の能力を発揮する自立した女性になることへの期待である。そのために、そのような生き方へのチャンスが地方に比べてはるかに多い東京に、妹を出すよう慫慂しているのである。

ところで、ここで注目したいのは、啄木がこの書簡で、そのためのある程度の犠牲を自分たちは払おうと述べている点である。『次の時代』として思い描かれているのは、もちろん、女性たちもまた男性と同等に、個人として認められ、人格が尊重され、その能力を遺憾なく発揮してゆける時代である。そういう新しい時代にふさわしい女性に育てるために岩崎の妹を東京に出す、そのための準備、出てきてからの世話、それら

に必要な人的支援や経済的負担、そういったことを多少無理をしてもやる、「犠牲」の具体的内容はそういうことであらう。

啄木はそのような行為を肯定している。「次の時代」のために自分が「犠牲」となることをある程度は受け入れるとする人生態度が、ここには認められる。

さて、『我等の一団と彼』の高橋彦太郎である。高橋は、この『我等の一団と彼』執筆中の啄木とはまったく正反対の覚悟を「私」に語る。高橋と「私」との次のやりとりを見てほしい。「私」が高橋の「野心」「主義」を追求し、とうとう高橋がそれを告白する場面である（第十七回）。

『——僕の野心は、僕等が死んで、僕等の子供が死んで、僕等の孫の時代になつて、それも大分年を取つた頃に初めて実現される奴なんだよ。いくら僕等が焦心^{あせ}つたつてそれより早くはなりやしない。可いかな？　そして仮令^{たとひ}それが実現されたところで、僕一個人にとつては何の増減も無いんだ。何の増減も無い！　僕はよく夫^{それ}を知つてゐる。だから僕は、僕の野心を実現する為に何等の手段も方法も採つたことはないんだ。』

（略）

『それだけ正確と信ずる結論を有つてゐながら、其の為に何等実行的努力をしないといふ筈は無いぢやないか？　僕は人間の一生は矢張自己の発現だと思ふね。其の外には意味が無いと思ふね。』

（略）

『僕は極めて利己的な怠け者だよ。（中略）我々日本人の国民的生活が、文化の或る当然の形式にまで進んで行くといふ事とだ——それが果して幸福か、幸福でないかは別問題だがね——それと、僕一個人の幸不幸とは、何の関係も無いものね。僕はたゞ僕の祖先の血

を引いて、僕の両親によつて生れて、そして、^{ネクストセネレンツ}次の時代の犠牲として暫らくの間生きてゐるだけの話だ。僕の一生は犠牲だ。僕はそれが厭だ。僕は僕の運命に極力反抗してる。僕は誰よりも平凡に暮らして、誰よりも平凡に死んでやらうと思つてゐる。』

この会話の中では、高橋の「野心」「結論」、その思い描く「文化の或る当然の形式」が具体的にどういふものなのかは語られていない。だが、これ以前の会話の中で、高橋は一貫して「我々の時代」を「個人意識の勃発」した時代と特徴づけている。そのことから見れば、ここで高橋が遠い将来のこととして思い描いているのは、人間が個人として尊重され、互いに自由に生きることのできる社会（男女平等も含まれる）の実現であると考えておいてよいだろう。

ところで、やはりここで注目したいのは、高橋が「^{ネクストセネレンツ}次の時代の犠牲」となることをはっきりと拒否し、「誰よりも平凡に暮らして、誰よりも平凡に死んでやらう」という思いや、「僕は、僕の野心を実現する為に何等の手段も方法も採つたことはない」という人生態度を述べている点である。

これは、先に見た書簡での啄木の人生態度——『次の時代』の為に我々も或程度までは犠牲にならうぢやないか？——とは、まったく正反対の態度である。啄木書簡に即して言えば、岩崎の妹を新時代にふさわしい女性に養育する努力の意義を、高橋は認めない。なぜか。そのような努力は「僕一個人の幸不幸とは、何の関係も無い」、つまり、そのような努力を試みたところで、あるべき新社会の実現がどれほど近づくわけでもなく、自分がそういう形で努力の見返りを得ることなど決してないからである。

このような高橋の考え方と態度には次のような問いかけが隠されてい

る。現代では、新しい時代を実現しようとする理想主義的な努力が、新社会の到来という形で報われることはない。だったら、そういう努力の意味は一体どこにあるか？ すなわち、報われないことがわかつている努力をあえてする意味は一体どこにあるか？

高橋と啄木との違いは、この問いかけに対する答え方の違いとして説明できる。報われない努力には意味がないから新しい時代への努力はないというのが高橋の答えである。これに対し、啄木の答えは、たとえ報われなくとも新しい時代への努力はする、である。

では、語り手の「私」はこの問いにどのように答えているだろう。

先に引用した場面の直後にそれは書かれている。高橋の言葉を聞きながら、「私」は自分の死んだ父のことを思い出していた。父は郷里で、明治十―二十年代の政治運動に身を投じた先覚者の一人であった。自由党に属し、第一回総選挙（明二十三―一八九〇・七・一、啄木五歳）で当選、だが第一議会（同・十一・二十九―明二十四―一八九一・三・七、啄木六歳）の会期半ばに盲腸炎にかかって、死去。その時、すでに家の財産はなく、残されたのは父の名望と一冊の著書『民権要義』だけであった。それが「私のまだ幼い頃の事」とされる。

高橋の言葉は、「私」に、この自らの理想に殉じた父の一生を「次の時代の犠牲」と意識させた。

次の時代の犠牲！ 私は父の一生を、一人の人間の一生として眺めたやうな気がした。父の理想――結論は父を殺した。そして其の結論は、子たる私の幸福とは何の関係も無かつた。――

「次の時代」のための努力に対する何の見返りも得られないままに死んでいった人生、結局は報われなかった一生を送った人間として、「私」

には父が見えてきたということである。それだけではない。その父が一生をかけて実現しようとした理想は、現実には「次の時代」の人間の幸福にさえ無関係であつたと「私」は思う。こうして、「私」は自分の経験から、高橋の言葉の意味するもの―遠い将来の理想のための努力は決して報われることがなく意味がない。だからそういう努力はしない―に真実性を認める。そして、それは、高橋に向けた自分の言葉への確信を揺るがせることになった。

高橋は、言つて了ふと『は。』と短い乾いた笑ひを洩らして、両膝を抱いて、髭の跡の青い髭を突き出して、天井を仰いだ。（略）私は、高橋の見てゐる世の中の広さと深さに、彼と私との年齢の相違を乗じてみた。然しそれは単に年齢の相違ばかりではないやうでもあつた。父に就いての連想は、妙に私を沈ませた。

理想主義に殉じた父の一生を意味がないと見てしまった息子の気落ちがここには描かれている。それとともに、「高橋の見てゐる世の中の広さと深さ」とあるように、「私」は自己の認識の単純さをここで反省している。「自己の発現」の一生、すなわち自己の信ずる「結論」のために「実行的努力」をする人生が、結局は報われないものであるとしたら、そういう生き方に何の意味があるか？ 「私」はそんなふうにな人生を問うたことが、それまでなかったのである。

さて、啄木と高橋と「私」をこのように見てくると、自己の一生が「次の時代の犠牲」であるという問題意識を共有しているのは啄木と高橋である。「私」にはそれがわからないことがわかる。そして、見たように、啄木と高橋とは結論において正反対の行動、人生態度をとっている。もちろん、啄木は高橋の無為の実践的帰結を知っており、それが作品におけ

る高橋批判の要点となっている。また、それゆえに自らの人生態度の選択——たとえ報われなくとも新しい時代への努力はする——もあつたのだらう。すなわち、自らの理想のためには、人生においてある程度の自己犠牲は受け入れるという選択である。だが、このような正反対の行動、人生態度の前提となる問題意識そのものは同じである、すなわち作品に描かれる高橋の葛藤が作者の啄木の葛藤でもあつたことは疑い得ない。この点では、高橋が啄木に重なり、「私」は啄木に重ならない。「私」は、自己実現としての人生、そこにおける理想と行動の一致を素朴に信じる、啄木や高橋とは異なるタイプの人物である。

二 志あるジャーナリスト

作品の第二十八回（最終回）は、夏から秋への季節の交代を描く。「私」の気持ちも新しくなり、「私」は病気で退社した友人松永に手紙を書く。作品はそこで終わる。

さて、この回で注目したいのは、語り手「私」の人物造型に関わる次の記述である。電車の中で三、四年ぶりに偶然出会った旧友が、社会部記者である「私」の書いた記事に注目してくれていたという。

彼は、長く逢はずに、且つ私の方では思出すこともなく過してゐたに拘らず、よく私の近状を知つてゐた。

『先月でしたか、静岡の製紙工場を視察にいらしたやうでしたね?』
そのやうに彼は言った。

『ええ。』私は軽く笑つた。彼は丁——新聞の読者だつた。

旧友が記事を通じて自分の記者活動に関心を持つてくれている、これ

四〇

は、新聞記者としては励まされることであらう。この後、家へ帰った「私」の感じている「嬉しいやうな、新しい気持ち」は、一つはこの出来事によつていられると思われ。

ところで、「東京朝日新聞」には、啄木がこの『我等の一団と彼』を執筆しているちょうどその時期に「静岡の製紙工場」の視察報告が載っている。明治四十三年六月七日から十三日にかけて、「●製紙見物」というタイトルで五回の連載である。執筆者は杉村楚人冠。当時、生産高日本一を誇つていた富士製紙の工場見学の記事である。

これは興味深い事実である。このことから、作者啄木は、この小説で社会部記者として設定した「我等の一団」（「私」も含む）を造型するにあたり、自分が勤める東京朝日新聞社の記者たちの実際の活動を念頭に置いていたのかもしれないと推定されるからである。その活動とは、いわゆる軟派記者ではなく、ジャーナリズムへの志を持った硬派の記者たちの活動である。

次の記事は、当時の新聞社の社会部の様子や社会欄の性格を教える。⑧

▼同じ新聞記者でも、社会部記者と言へば、二六時中社会の暗黒面に突入つて、地獄の亡者の様に、腐敗した良心の屍骸計り扱つてゐる御連中だもの、余りお人の好い筈は無い

▼殊に各社を通じて、此部面は大俗物や鼻下長閣下の巢窟である。

「三面記事」という言葉があるように、当時の新聞の社会欄は殺人、心中、強盗、自殺、賭博、窃盗、虐待、姦通、強姦などの警察沙汰になつた事件や花柳界の艶聞、評判、珍談・奇談などを、興味本位に取り上げる記事で満ちていた。社会部にいるのは、そのような記事を書く記者

ただだから、たいへんな俗物や女好きがひしめいていると、この記事は述べている。

東京朝日新聞の社会欄も基本的には例外ではなかった。だが、次の記事が述べるように、そこにはジャーナリズム本来の活動にふさわしい社会記事が載ることもあった。^⑨

一事件出来するや、編輯長が四方に命令して、記者を駈り立て、盛んに一号活字を濫用して、全一頁も同一事件の記事で埋めて了ふといふやうな、所謂米国式な遣り方は嘗て朝日新聞に見られない。何処までも堅実である。質素である。凡ての調子が高い。少なくとも仮名を拾って読む新聞では無い。各新聞が軟かに軟かにしやうとする社会欄にも、朝日は平然として硬い社会種を入れる。

「所謂米国式な遣り方」とは、「営業本位」のセンセーションナリズムを指す。この記事によれば、東京朝日新聞にはそういう傾向が見られないという。そして、社会欄にも「硬い社会種」が載るといのである。

この「硬い社会種」として、『我等の一団と彼』の執筆に重なる時期では、例えば「東京に於ける社会改良事業現況」というシリーズ記事があった。明治四十三年五月二十二日に掲載が始まり、六月二十日まで、計二十回の記事が載った。^⑩無署名であるが、その最後二回は、「見聞雑記」(上)(下)として、取材を終えた記者の意見が記されている。そこで記者は、「職工保護事業」や「公立質制度」「公立労働紹介所」などの必要を訴え、また「子守教育」や「下宿屋の改良」「細民住宅問題」などへの注意を喚起する。また、「社会欄」にはないが、地方の視察記事もたびたび見ることができる。明治四十二年八月五日から始まった「東北の東半面」というシリーズは、「産業視察が旅行の目的なりしも」

堅苦しさを避けるために「時には山水談も書くべし」として連載を始めている。^⑪楚人冠の「●製紙見物」は、紙の一般的な製造工程と新聞用紙(巻取紙)の製法、形状、種類、値段、各新聞社の利用実態などの話を肩のこらない視察記に仕立てた啓蒙記事である。

これらの記事はいずれも何らかの意味で社会への寄与が目指されている。啄木自身もまた「百回通信」に新聞の本来の役割を社会の「発議者、指導者、批評者」と記している。^⑫その啄木にとって、記者が本来なすべき仕事とは、こういった記事を書くことであつたろう。

さて、『我等の一団と彼』に戻る。

社中の五、六人の不平連とされる「我等の一団」(「私」も含む)の社会部記者としての側面は、東京朝日新聞のこつこつた記者たちの姿を念頭に置いて造型されたものと考えてみたらどうだろう。第一回の冒頭に次の場面がある。「我等の一団」が集まって飲み、酔いが回って、各人が気焰をあげているところである。

何れも此れも火の出るやうな顔を突き出して、明日にも自分等の手で社の改革を為遂げて見せるやうなことを言ふ。平生から気の合はない同僚を、犬だの、黴菌だの、張子だの、麦酒罈だのと色々な綽名をつけて、糞味噌に罵倒する。一人が小皿の縁を箸で叩きつけて、『一体社では我々紳士を遇するの途を知らん。あんな品性の下劣な奴等と一緒にされちや甚だ困る。』と力み出すと、一人は、胡座をかけた股の間へ手焙りを擁へ込んで、それでも足らずにぢりぢりと躁り出しながら、『さうぢや。徒らに筆を弄んで食を喰むのう。文明の盗賊とは彼奴等の事ぢや。社会の毒虫ぢや。我が輩不敏といへども奴等よりはまだ高潔な心を有つとる。学問をせなんだ者は真に為様がないなあ。』と酒臭い息を吹いてそれに応ずる。

——そして我々は、何時誰が言ひ出したともなく、自分等の一団を学問党と呼んでゐた。

この記者たちは、自分たちを「学問」があつて「高潔な心」を持つ「紳士」であると自負し、「気合はない同僚」を「品性の下劣な奴等」、「徒らに筆を弄んで食を偷む」、「文明の盗賊」、「社会の毒虫」、「学問をせなんだ者」と批判する。これは、「気合はない同僚」に、いわゆる三面記事を得意とする軟派記者を髣髴とさせる批判である。この記者たちに毛嫌いされている同僚記者の逢坂をその一人と考えていいかも知れない。

また、記者たちは現実の取材活動を自分の思いどおりできるわけではない。彼らは「命令が出ると何処へでも早速飛び出して行」かねばならない（第一回）。例えば、安井は「。。。さんから活動写真の弊害調査を命ぜられ」て、「早速昨夜浅草へ行つて見た」と言つし（第二十四回）、「私」にしても、「或る殺人事件の探訪に出かけ」ることもある（第二十一回）。次は、「私」による高橋の紹介であるが（第二回）、記者自身の意にかなう取材、気乗りのしない取材のどちらもが当然あつただろうことを思わせる記述である。

『高橋さあん。』と社会部の編輯長が呼ぶと、黙つて立つて其の前へ行く。『はい。』と云つて命令を聞き取る。（略）渡された通信の原稿を受け取つて来て、一通り目を通す。それから出懸けて行く。（略）他の者のやうに、「何だ、つまらない。」といふやうな顔をすることもなければ、眼を輝かして、獲物を見付けた獵犬のやうに飛び出して行くこともない。

「我等の一団」の不平にも、こんな所から来るものがあつたかもしれ

ない。

さて、このように、東京朝日新聞の記事・紙面と重ね合わせて「我等の一団」の人物造型を考察してみると、語り手「私」の人物像をジャーナリズムへの志を持つ硬派の社会部記者に比定することもあながち無理ではないと思われてくる。私は、このような「私」の人物造型を、作者啄木と距離を置きつつ「彼（高橋）」を批判的に相対化するために行なわれたものだと考えたい。最後に、節を改めてそのことを論ずる。

三 啄木と高橋と「私」

『我等の一団と彼』の作品中、「彼（高橋）」への批判は、病気の松永への世話を「残酷な親切」と感じる「私」の感想や、「消閑法」と露骨に言う剣持の言葉によつて示されている。「我等の一団」と「彼（高橋）」との関係が主題を担うとは、両者のこのような関係を言う。いま仮に、これらの批判を登場人物の視点レベルの批判と呼んでおこう。これらの批判は、「私」や剣持が自己の見聞を自らの視点でそう感じ、そう考えたというレベルにある。

これに対し、人物造型レベルの批判というものを考えてよいだろう。登場人物の人物像そのものが、他の登場人物を相対化し、批判的に捉えさせる、そういう人物造型がされていることを指す。最終回で「私」が「静岡の製紙工場」の視察記事を書いていることが記される。そのことが示唆するのは、「我等の一団」が硬派の社会部記者たちとして想定されているのではないかということである。そして、それは、この人物造型レベルの批判をも啄木が意図していたことを示すものではないだろうか。

高橋の人物像は、理想主義的志向を持ちながらも、自らがその「犠牲」になることを拒み、その覚悟を「利己」の立場の徹底として貫こうとす

る人間とすることができ。これに対し、作者の啄木はこの時期、先に見たように、理想主義的志向を持ちつつ、自らがその「犠牲」になることもある程度は受け入れ、他者のためにも力を尽くそうという人生態度を示していた。この二人に対し、「私」には「将来の日本」を思い描くような理想主義的志向は認められない。「私」に想定できるのは、前節で論じたように、ジャーナリストとしての志である。そして、それは、社会の不正を告発し、正義・公正の実現に努め、市民生活の向上や現実社会の改良を言論を通じて推し進めようとする行動をとるものだろう。そう、こういった記者たちは、それが「犠牲」であるかどうかなどと考えなくてもなく、目の前の社会の改善・向上のために行動している人々たちなのである。「我等の一団」が人物像として高橋に批判的に対置される点はこの点である。遠い将来に理想社会を望みながらの現在の無為と、社会に寄与する行動を現にとっていることのどちらが価値ある姿であるかは、言つまでもなく明らかだろう。

作品の最終回で、「私」の旧友が、記事を通じて「私」の記者活動に関心を持ってくれていたということが書かれる。「私」にとってそれは、社会部記者としての今の自分のあり方を肯定的に感じさせてくれる出来事だった。作者啄木の、「私」を含む「我等の一団」の記者たちへの肯定的とらえ方もまた、そのことには示されている。

高橋と啄木の共有する問いかけ——現代では、新しい時代を実現しようとする理想主義的な努力が、新社会の到来という形で報われることはない、だったら、そういう努力の意味は一体どこにあるか？——の答えは、「利己」の立場に立つ限り、論理的には一つしかない。そういう努力の意味はないのである。そこで「自分自身の問題を何処までも机の上で取扱つて行かう」(「硝子窓」)^④とすれば、人は高橋的韜晦を生きてゆくしかないだろう。

そのような生き方を拒否するとすれば、人はおのれが時代の過渡期に生きているという「運命」を受け入れ、「利己」の立場にこだわらず、「犠牲」となることも厭わないという人生態度への、行動における転換が必要である。この転換を促すものは、机上の論理ではなく、人生の経験である。「利己」の立場にこだわらず、「犠牲」となることも厭わない行動が現実であり、それが価値あるものだと感じられた時、人は理屈を超えて、そのような人生態度に学ぼうとするものではないだろうか。そして、現に活躍している硬派記者、志あるジャーナリストたちの姿に接することは、そのような価値体験の一つになりうるであろう。

(了)

注

- ① 明治四三(一九一〇)・五一六 執筆、生前未発表。大正元(一九一二)・八・二七—九・二七「読売新聞」連載(全二八回)。大正五(一九一七)・五「生活と芸術叢書」第六編として単行本化(全六章)。本稿では、『石川啄木全集 第三巻』(一九七八・一〇、筑摩書房)所収の初出テキストを用いる。
- ② 小田切秀雄『新編石川啄木の世界』第三文明社、一九八〇・一一。また、小川武敏は『石川啄木』(武蔵野書房、一九八九・九)で、「私」を「透明で無色の話者として高橋・松永らを読者に伝える脇役に終始している」とする。
- ③ 上田博『啄木 小説の世界』双文社出版、一九八〇・九
- ④ さらに、上田は『鑑賞日本現代文学第六巻 石川啄木』(角川書店、一

九八二・六)において、「啄木は、内的な葛藤を 私 と高橋に仮託しながら、混沌とした心的状況、混濁した状況認識を整理していったのである」と、結末に至る作品展開を説明している。

- ⑤ 若林敦『我等の一回と彼』における「二重生活」批判（国際啄木学会編『論集石川啄木』おつふう、二〇〇四・四）

- ⑥ 作中に「私」が内職として「ロオズヴェルト」の翻訳を手がけているという記述が出てくる（第十二回）。「ロオズヴェルト」（米国前大統領セオドア・ローズヴェルト）は、「私」のこのような人物造型を支えるために啄木が用いたシンボルであると考えられる。本稿では紙幅の関係でその論証は割愛するが、上田博「高橋彦太郎 はどこから来たか」（『石川啄木抒情と思想』三一書房、一九九四・三）にも「ロオズヴェルト」のシンボリック性の分析がある。

- ⑦ 記事の署名は「楚」。楚人冠は当時学芸部長の肩書きを持っていた（『朝日新聞社史 資料編』（朝日新聞社、一九九五・一）。だが、遊軍として活躍していたようだ（後出注⑨の記事による）。以下、記事の副題と掲載日付を記す。「一、バイサル」（六月七日）、「二、藁とボール紙」（六月九日）、「三、檻（こ）と上等紙」（六月十日）、「四、新聞用紙の上」（六月十二日）、「五、新聞用紙の下」（六月十三日）。

- ⑧ 「東京新聞社の社会部」（明四二・一〇・一七、二四『サンデー』第四七、四八号）（『明治新聞人文学集（明治文学全集九一）』筑摩書房、一九七九・七所収）

- ⑨ 「東京朝日新聞社」（明四二・八・一五、二二『サンデー』第三八、三九号）（同前所収）。この記事は、東京朝日新聞の紙面について、五、六、七の三面が社会部の編集、二、三、四の三面が編集長佐藤真一の編集であるとしている。なお、『朝日新聞社史 明治編』（朝日新聞社、一九九〇・七）は、明治四十一年十二月二十日の改革後の紙面を以下のように整理している。（一面）広告、（二面）内外電報と政経、（三面）社説、政経、純文学小説、（四面）政経、（五面）社会、（六面）家庭、学芸、趣味娯楽、運動、（七面）通俗小説、短い雑報や読み物、新刊紹介など、（八面）商況。

- ⑩ 六面に掲載。五月は二十二日から三十一日まで毎日、六月は二、三、十、十三、十六、十八、二十日。

- ⑪ 署名は「無冠人」、若松、仙台、盛岡への視察旅行記事。八月十九日ま

四四

で三面に十三回連載。また、これ以前にも「出羽と陸奥」（署名は風来、米沢、山形、秋田、弘前、青森への視察旅行記事）が六月六日から二十八日まで三面に十六回連載され、以後には「御秋田記」（署名は告天子、秋田県の諸新聞記者招待による視察旅行記事）が八月二十日から九月十日まで三、四面に十八回連載されている。後者は観光名所の紹介も多いが、最終回に「斯うやかましく新聞に書き立てゝ東北振興を絶叫してくると、秋田人も最早昔の呑（のん）気で済まされもせまい」と、記事の目的が記されている。なお、楚人冠の記事の掲載は四面である。

- ⑫ 「百回通信 十二」（『岩手日報』明四二・一〇・二二）

- ⑬ 注⑥でふれた「ロオズヴェルト」のシンボリック性はこの点も支えていると私は考えている。別稿にて論じたい。

- ⑭ 『新小説』明治四三・六

〔付記〕

啄木の文章の引用は『石川啄木全集』全八巻（筑摩書房、一九七八・四—一九八〇・一）によった。また、東京朝日新聞の記事の引用に際しては漢字を通行の字体に、総ルビをバラルビに改めた。

（長岡技術科学大学助教）